

# 写真によせて

## フクジュソウ *Adonis ramosa* French.

札幌市 梅沢 俊

春一番に華やかな花をつけるので、どうしてもレンズを向けてしまう。お蔭で私のフィルムストックは溜まる一方だった。今はデジタルなのでスペース的には楽になったけれど、数ある中からの写真選びがややしんどい。今回はその中からの1枚だ。

「この格調高い『北方山草』になんで飽きるほど見ているフクジュソウなの？さては終活、いやストック整理じゃないのか」なんて声が聞こえてきそうだが、これでいいのだ。

まず皆さん、手持ちの図鑑を開いてフクジュソウの写真を見ていただきたい。そして茎の色に注目！私の手持ち図鑑では全てあずき色である。今回掲載した写真は白っぽい緑色である。このような例はヒトリシズカではたまに見かけるが、フクジュソウでは初めてだった。この株は藻岩山の中腹で撮影した。

江戸時代から広く庶民に親しまれてきたフクジュソウで、数々の品種が作られたそうだが、野生の株では花の変異はほとんど見られない。今度は何とか白花に出会いたいものだ。

## 北海道のラン

江別市 大沼 弘樹

ウスギヌユウシュンラン

本会誌26号(2009)にて、本会会員の梅沢俊氏によって写真と和名が提唱され、2017年に神戸大学の末次健司教授により *Cephalanthera subaphylla* f. *leucophylla* の学名で記載された、ユウシュンランの品種で、葉緑素をほとんど欠いています。ざっくりと意識すれば、*subaphylla* は「ほぼ無葉」、*leucophylla* は「白い葉」といったところでしょうか。ユウシュンラン自体も葉がかなり退化しており、生育に必要な光合成産物の大部分を菌根菌に依存しているため、ウスギヌユウシュンランのように葉緑素を欠いても、生きていく上ではあまり支障が無いのでしょうか。しかし、ごくわずかに葉緑素が残っているので純白ではなく、実物はまさに透き通る「薄絹」のよう。ちなみに北米には、*C. austiniiae* という、種レベルで葉緑素を欠いた同属植物があるようですが、長い年月をかけてユウシュンランも似たような生態、形態へと進化している過程なのかもしれません。

レブンアツモリソウ

初夏と呼ぶには肌寒い6月初旬の礼文。まだ展開しきらない葉の間から、おそろおそろ花を覗かせる姿は、可憐ながら寒々し

くも思えました。まだ咲いたばかりなのに、霜に当たってしまったのか、花被片の縁が茶色く枯れ込んでいるものもあり、気候の厳しさがうかがえます。期間限定で一般開放される観察用木道から、よく目を凝らしてみると、指先くらいの大きさの実生もあちこちに生えていることに気づきました。同じ地区にはカラフトアツモリソウや、雑種のウェントリコスムも見られますが、咲き始めるのはレブンアツモリソウより一足遅いようです。

仙台市 国京 潤一

コアニチドリ

コアニチドリは東北で3カ所ほど見えますが、花数が少なくこのように多いのは初めて見ました。6月の観察会でつぼみを確認していたので、期待通りに沢山の花を楽しめました。

札幌市 齋藤 央

別海町の湿地のラン

別海町別海・本別海の数多の湿原に通い詰めた2022年5月から10月の中でも、様々なランに出会えた6月から8月は特に楽しい期間でした。

コアニチドリは限られた場所に群生する傾向がありました。唇弁の側裂片が株によって長短が著しく異なり、側裂片が殆ど無いくらい短い株の隣で、中裂片よりわずかに短い程度まで側裂片が長く伸びた花が咲いていたりしました。少し側裂片が伸びた花は、桃色の頭巾と白いワンピースをま

とった妖精のようで、何とも可愛い姿です。ムセンスゲやホロムイクグとの相性が良いらしいので、それらのスゲ類が見られた場所では再探索の余地があるように思われます。2023年以降の探索の楽しみがひとつ増えました。

ホソバノキソチドリはトキソウに次いでよく見かけるランでした。歩けども歩けどもヌマガヤ坊主が続く乾燥した湿原でも、この花に会うと報われる思いがしました。とある湿原では東側にトキソウが多く、西に行くとも植生は全く変化しないのにトキソウだけがホソバノキソチドリに交代していく、という珍現象が見られました。

函館市 酒井 信

イイヌマムカゴ

花を見始めた初期の頃、よく通った観察地で見つけた思い出深い植物。風変わりな名前はこの植物、出会えるとは予想もしなかった。比較的多数生育している(いた)2地点、開発が進み周辺は畑地化等に風前の灯火の感がある。今回の生育地の大規模伐採は植林のためのようで回復も期待され、開発からしばらくは守られることがせめてもの救いかも。

オニノヤガラ

左下の画像はアオテンマ、古い写真である。近年まで、何度か再訪するも出会えない、まさに一期一会、筆者にとっては貴重なもの。うまく撮影できない入門時の画像、プリントをコピーした。

### ツチアケビ

この地のツチアケビは長い付き合い、2007年に撮影した画像が残っている。高速道路工事が一部かかり心配したが今年も無事見ることができた。

札幌市 佐生 淳一

### ユウシュンラン

夏にはエゾイラクサやオオイタドリが繁茂する河川敷であるが、撮影した春は草丈の高い草本が少なく、十分に日光を浴びることができたようだ。本株の草丈は10cmにもみたく、同行者の「これは何？」の一言がなければ気づかず踏みつけてしまうところであった。確認は1株のみであったが、エゾエンゴサクやニリンソウとともに可憐な花を咲かせていた。

### サワラン

他の湿地植物探索時に確認した。広大な湿地に点々と株があり、鮮やかな紅色が目をついた。同行者は日本各地の湿地をめぐる研究者であり本種はやや見飽きた感があるようだったが、私はフィールドでは初見であったことから確認はとてもうれしかったことを覚えている。ほかにはコアニチドリの花も確認できた。こちらも私にとっては初見であった。

### ミズトンボ

種々のスゲ属が繁茂する広大な湿地にて確認した。確認地は頻繁に訪れるフィールドであるが本種の花の時期は短く、ベストのタイミングに出会うことは稀に思える。

しかも毎年は開花しないようだ。初見時には側萼片や唇弁、距の構造が興味深く、時を忘れて見入った記憶がある。トンボ？私には妖精もしくは宇宙人が両手を広げているように見えた。

釧路市 佐藤 照雄

着生ランが釧路にも

道東には分布していないとされてきたツリシュスランが昨年釧路で、野の花愛好家のTさんによって初確認されました。それも偶然に見つかったのではなく、昨年出版した小著「ひがし北海道の野生ラン」に掲載したヒロハツリシュスランに刺激をうけて、森に入ると意識して樹の上を見るようになり、目に入った瞬間にランだと分かったと言うのだから、著者冥利に尽きるというものです。Tさんはその花の見事さに感嘆の声をあげ感動したと言います。それもそのはず直径1mほどのシナノキの樹上に65株もの花が大群生していたのだから無理ありません。過去の記録では釧路でヒナチドリも記録されているので、これから次々と着生ランが見つかるかも知れません。

札幌市 佐藤 ひろみ

ムカゴソウ

確かこの辺りにあったはずなのに……。草叢が茂ってしまい、お目当てのムカゴソウが見当りません。きっとどこかにあるはず……。と思い広範囲に捜し始めたところ、ややしばらくして何とか見つけることができました。やった～！あきらめないで

よかった～。

#### ヤチラン

スゲを目当てに根室の湿原を歩いていました。その甲斐もあって寒地に生えている種々のスゲを眼にすることができ、加えて念願のムセスゲを見つけ新産地としてご報告することもできました。周辺にもっとあるのではないか・・・。グーグルマップで周辺の湿原に当たりをつけ分け入ってみましたところ、なんとなんと！びっくり！！ミズゴケのなかに、以前京極湿原で見せて頂いた小さなお宝が！！探索した甲斐がありました。その後毎年のように通っていますが、どんどん数が減っているような気が・・・。採らないでね。

#### 江別市 神(濱本)真琴

##### シロバナモジズリ

ネジバナの白色と思って撮影しましたが、あとでシロバナモジズリという名前があると知りました。

野幌森林公園では撮影マナーが良くない方が少なくありません。自然ふれあい交流館では自然の魅力や大切さを伝えるとともに、マナー等の普及啓発も続けていきます。

#### 美唄市 新田 紀敏

一時期、ランの花を見て歩くのに凝っていました。古い写真が多く、もうすっかり忘れていましたが、今回写真を整理していて結構いろいろなものを見てきたものだと我ながら感心しました。ヒナチドリやフジ

チドリを見たときは感動ものでした。一方で、何度行っても、花が咲いていると教えてもらっても、未だに見たことがないムカゴソウのようなものもあります。今回の写真は穴を埋めているうちに白花・変わり者が多くなりました。ハクサンチドリ、トキソウは真っ白ではないのですが。印象に残っているのはジガバチソウ。滝野すずらん公園近くのカラマツ林、脇で偽傷しながら這いずっているヨタカに急かされながら、ごめんよ～と言いつつ撮ったもの。ヒメムヨウランは登山道で偶然見つけましたが、翌年も咲いていました。残念なことに今は林道が決壊して・・・。ホテイアツモリソウは花が咲いていたり、穴だけだったりでしたが今も元気になっているかなー。

#### 北斗市 長谷 昭

##### ツレサギソウ

ツレサギソウは道内ではやや稀な植物のようですが、函館山では近縁のトンボソウとともに比較的良好に観察されます。しかし、この種は、樹下に生育するトンボソウと異なり日当たりの良い草地を好むため、勢力を拡大しているササ類ともろに競合しています。写真の株は2009年に撮影したのですが、数年後にはササ類に埋もれてしまい、今では見ることはできません。函館山におけるササ類の適切な管理が望まれます。

##### ヤマトキシソウ

近縁のトキシソウが道内各地の湿原に広く分布しているのに対して、ヤマトキシソウは

道内分布が限られているようです。道南では、恵山の火口原の高山植物群落の中にかかなりな数の個体が生育しており、恵山登山の楽しみの1つとなっています。

江別市 藤田 玲

アキタズムシソウ・

セイタカズムシソウ

ズムシソウの仲間は、主に唇弁形態の異なる3つのタイプがあることが知られていました。比較的最近(2019年)、形態に加え遺伝子情報の解析結果から3種(ズムシソウ、セイタカズムシソウ、アキタズムシソウ)に分けられると発表されました。アキタズムシソウは新種としての記載です。3タイプの違いを簡単に触れると、ズムシソウは他より大きな倒卵形の唇弁を持ちます。残りの2タイプのうち、セイタカは、ズムシソウの唇弁を一回り小さくした格好で、アキタズムシソウは、唇弁の縦横比が他とは異なり、縦に長い唇弁を持つのが特徴です。

ズムシソウの仲間は産地が限られ、観察する機会はあまりありませんが、道内ではセイタカよりもアキタを見る機会が多い気がしています。皆様の観察状況はいかがでしょう。

マイサギソウ

現地で見つけたときは、私の苦手な地味なランの仲間だなと思い、撮影だけすませて後で名前を調べることにしました。マイサギソウはヤマサギソウ(広義)の種内分類群の一つですが、識別ポイントは距と背萼片の形状ということがわかりました。写

真からは背萼片の形状は詳細に検討できませんでしたが、距はS字状に曲がりながら上方に伸び上がっています。この点は問題なさそうです。小さい写真ですがサギが舞っているように見えるでしょうか。

マイサギソウは、なかなか出会う機会のないランですが、昨年、道南の海岸に近い草原でマイサギソウ?を見つけました。今年再訪し、背萼片をじっくり観察したいと思っています。

旭川市 舟橋 健

アオサイハイラン

花友達に変わった色のサイハイランが、有るので見てと言われ、行くと今までに見たことのない色の花が咲いていた。これがサイハイランなのかと思う程で、綺麗なクリーム色(黄白緑色)をした花で、珍しくもあり、感動した。図鑑等で調べたが、記載もなく珍しい種の様なので、ランの研究者に「シロバナ? or アルビノ?」等と問合せたら、「アルビノには、"アオサイハイラン"の名が付いている」と教えて頂きました。

札幌市 本多 丘人

だいぶ前に道内のスマレをすべて撮影しようとしたことはありましたが、ランに関しては超希少種や自分では見つけられないものが多いため、道内産すべてを撮ろうとは思いません。チャンスがあれば出かけますけど。むしろ、今回の掲載種の中ではタカネトンボやホザキイチヨウランなどのよ

うに「あらあらこんなところにこんなものが」的にランと遭遇する方がなぜか嬉しくなるものです。とくに緑色系のランは見逃がしがちですから、同行の皆さんには感謝するばかりです。標本づくりが不得手（面倒）な自分は鑑賞して撮るだけではありませんが、学術的な証拠にはならなくても記録にはなるかなと思ったりしています。ランの花を押してしまうのにはちょっと抵抗がありますしね。

### *Cypripedium macranthos* アツモリソウ（裏表紙）

札幌市 吉中 弘介

撮影地のウラジオストック（ロシア沿海地方南部の州都）近郊はアツモリソウ属の宝庫です。裏表紙のアツモリソウや、このページ下のカラフトアツモリソウ、チョウセンキバナアツモリソウ、それにアツモリ

ソウとカラフトアツモリソウとの交雑種のウェントリコスムなど、いろいろな種類のアツモリソウ属が見られます。特にアツモリソウやウェントリコスム（交雑種）の花弁の色は白色から紫色に亘るグラデーションが見られ、思わず見とれてしまいました。

何故この地域にアツモリソウ属の種類が多いのか、また何故交雑種も多いのか！？案内してくれた地元の植物学者の見解ですが、この地方がアジア大陸東部におけるアツモリソウ属の発生地の一つであり、今も進化を続けているホットスポットであるということでした。

日本で人気のあるアツモリソウ属ですが、これまで地元民にとってはありふれた野草の一つに過ぎなかったものでした。しかし、海外（日本など）からのツアーが盛んになり、その価値に目覚めたせいか地元で採取されるようになり、良い群落が減っているとのことでした。



カラフトアツモリソウ *Cypripedium calceolus*（左）とチョウセンキバナアツモリソウ *Cypripedium guttatum*（右） いずれもウラジオストック近郊にて  
撮影：吉中弘介 2014年6月11日